Topics 2

なぜ“4ワクチンの定期接種化”が求められるのか

2013年3月に予防接種法の一部が改正され、新たに３つのワクチンが定期接種となりました。一方、附帯決議にあげられた小児の4つのワクチン（水痘、おたふくかぜ、Ｂ型肝炎、ロタウイルス）の定期接種化の道筋は、現時点でみえていません。あらためて、なぜ定期接種化が必要なのか考えてみます。

●VPDは“ワクチンで防ぐべき病気”

VPDは“ワクチンで防げる病気”です。同時に“ワクチンで防ぐべき病気”でもあります。なぜなら、VPDにかかってしまうと現在の最新医学をもってしても根本的な治療法がないために、今でも子どもや大人が亡くなったり、後遺症を残したりするからです。ワクチン開発は技術的にも費用的にもとても難しいことです。にもかかわらず、その困難を乗り越えてワクチンが作られたのは、それが重大な病気だからです。よく知られている水痘やおたふくかぜでさえ、人の命を奪うことがあります。

逆に言えば、ワクチンが開発され普及すれば、VPDによる被害は激減します。WHOが世界根絶宣言をした天然痘や世界各国で排除宣言がされている麻疹がその例です。今年の4月から日本で定期接種となったヒブや小児用肺炎球菌ワクチンをいち早く定期接種にしたアメリカでは、実際に細菌性髄膜炎にかかる子どもが激減しています。だから子どもたちをVPDから守るにはワクチンが必要なのです。

●情報格差、経済格差なく子どもを守る

当会は、2008年の設立以来、国に対して任意接種ワクチンの定期接種化を求めてきました。一方で、保護者に対して任意接種ワクチンの積極的な接種を呼びかけ、この数年で任意ワクチンの認知度や接種率の向上がみられました。しかしながら、接種率はいまだ十分ではありません。

任意接種の場合、保護者は任意ワクチンの存在を知り、高額な接種費用を負担しなければ、ワクチン接種ができず、子どもをVPDから守ることができません。せっかくワクチンがあっても定期接種にしなければ、受けられない子どもたちが多く、結果的にはVPDから守られません。

定期接種化の要望はおたふくかぜと水痘に比べてロタウイルスとB型肝炎ワクチンのそれほど高くないようにも見えますが、乳幼児のVPDとして認知が高まるにつれ、定期化の声が大きくなると推察できます。VPDから子どもたちを守るために、これらの情報格差や経済格差を解消しなければなりません。それには、定期接種化が必要なのです。

●WHOの勧告

WHOは、ワクチンで世界中の子どもたちを守るための勧告をしています。現在、WHOが勧告しているワクチン（下表）のうち、B型肝炎、ロタウイルス、おたふくかぜ、水痘のワクチンは日本の定期接種に含まれていません。グローバルな疾患管理の観点からもこれらの４つのワクチンは定期接種であるべきワクチンなのです。

表『小児の定期接種として予防すべきVPD』

全般的	BCG（結核）、B型肝炎、ポリオ、ジフテリア、破傷風、百日せき、インフルエンザ菌b型（ヒブ）、小児用肺炎球菌、ロタウイルス、麻しん
地域的	日本脳炎、黄熱
先進国対象	おたふくかぜ、風しん、季節性インフルエンザ、水痘

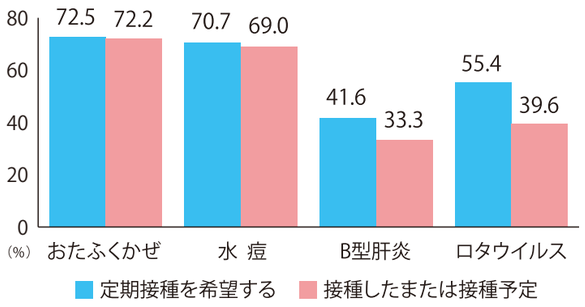
出典：世界保健機関.推奨される定期予防接種-WHOポジションペーパーの要約を改変

●附帯決議「4ワクチンの定期化を検討」を尊重

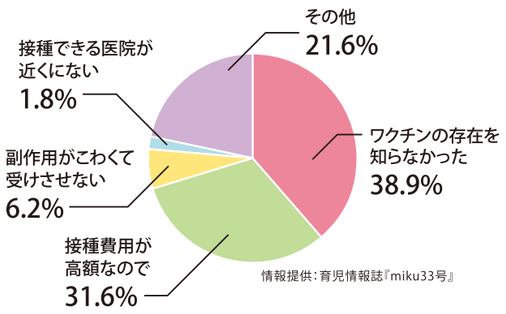
2013年3月30日に予防接種法の一部を改正する法律（平成25年法律第8号）が公布され、子どもの定期接種ワクチンに新たにヒブワクチンと小児用肺炎球菌ワクチンが加わりました。この改正法案に対しては衆参両院から附帯決議が提出されました。附帯決議の内容は、水痘、おたふくかぜ、高齢肺炎球菌、B型肝炎の4ワクチンを定期接種の対象とすることについて検討し、平成25年度末までに結論を得るというものです。しかしながら平成26年度の予算概算要求においては「予防接種法改正法の衆参両院における附帯決議を踏まえ、定期接種ワクチンの追加については、引き続き検討する」と明記されてはいますが、必要な予算措置はとられていません。

附帯決議とは、「議決された条約・本案などに関して，施行細則・解釈の基準などを希望意見として表明する決議（大辞林より引用）」。法律的な拘束力はありませんが、政府はこれを尊重すべきです。会では、今後も附帯決議の遵守と尊重を求めて残りのワクチンの定期化を要望し続けてまいります。

◆任意ワクチンの定期接種化の意向と接種状況（n=1,111）



◆接種しない理由（n=1,001）



情報提供：育児情報誌『miku33号』

小児用肺炎球菌ワクチンが7価から13価へ切り替え

肺炎球菌ワクチンは約90種類ある肺炎球菌の菌株の中で、髄膜炎などの重い病気を起こしやすい菌株を選んでつくられています。13価ワクチンはこれまでの7種類に加えて6種類の肺炎球菌に予防効果があります。

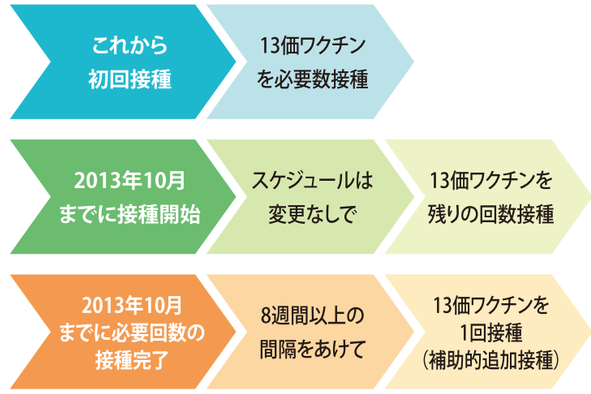
●予防接種スケジュール

標準的な接種スケジュールはこれまで通りです。2013年11月以降は、初回接種でも2回目以降でも医療機関で13価ワクチンに切り替えて使用します。ただし、接種可能期間が6歳未満までと短縮されましたので、ご注意ください。

●接種完了者の追加接種（補助的追加接種）

すでに7価ワクチンの接種が完了している場合に13価ワクチンを接種すると、従来の7種類に6種類を加えた13種類の肺炎球菌による感染症を予防できます。スケジュールは、7価ワクチンの最終接種日から8週以上あけて13価ワクチンを1回接種します。

米国では補助的追加接種を推奨し定期接種として受けられましたが、日本では任意接種（接種費用は自己負担）となります。一部の自治体では接種費用の一部を助成しています。

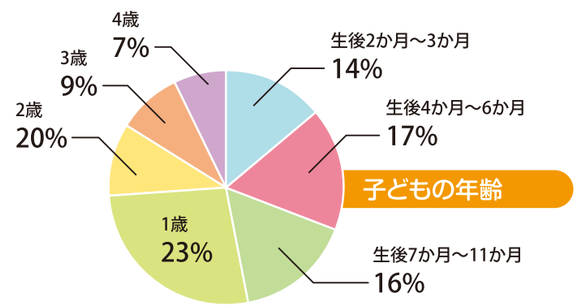


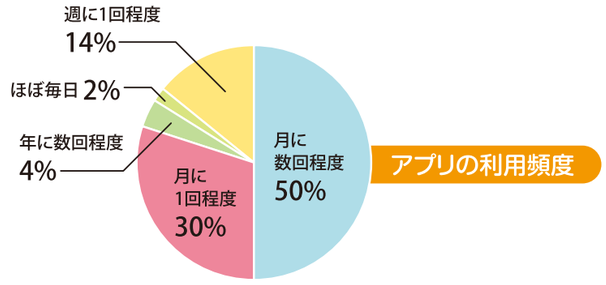
Report

『予防接種スケジューラー利用者アンケート』実施

2013年9月に今後のアプリ開発に役立てることを目的として、『予防接種スケジューラー』アプリのユーザーアンケートを実施しました。調査結果から、接種するワクチンが多い0歳や1歳のお子さんを中心に、少なくとも月に1回（約6割の方は月に複数回）はアプリを活用して、スケジュールを管理をしていることがわかりました。

「予防接種スケジューラー」アプリは、10月時点でAndroid端末およびiOSの合計ダウンロード数が28万を超えました。多くの方にアプリを便利にお使いいただけるよう、これからも接種スケジュールの更新や機能向上に努めてまいります。





（『予防接種スケジューラー』アプリユーザーアンケート n=1065）

出演＆記事＆取材協力

- 毎日新聞（2013.6.10）
- 読売新聞（2013.7.4）
- 公明新聞（2013.8.28）
- 朝日新聞デジタル（2013.10.31）
- YAHOO!JAPANニュース（2013.9.11）
- キャリアブレイン（2013.9.11）
- 医療介護ニュース（2013.9.12）
- ニッセイ「SALUTE8・9月号」（2013.8.1）
- Newsweek 0歳からの教育（2013.11.15）
- 「小児科（11月号）」金原出版（2013.11.15）
- kodomoe（白泉社）（2013.11.7）
- 周産期医療の広場（2013.6.29）
- AllAbout チビタス特集（2013.7.30）
- わたしムーブ（2013.6.27）